特定非営利活動法人 ドクターMAYA 人道基金
ニュースレター
http://dr-maya.net/

＜静かな戦士の旅立ち＞

古都のはずれ、竹林の里という風情で、その病院はたたずんでいた。

古い結核病棟が奥の小高い丘陵に点在し、昔ながらの屋根付き廊下が小さな棟々をつないでいた。

本館に続く板廊下を行き来するナースの足音と鳥たちの声が時々静けさを破るほかは、下の街の喧騒も届かない療養所が起源の病院であった。

私が新任の医師として採用された当時は、日本が国民的感染症をようやく克服して間もない頃で、その永年とも思われる病で生涯をこの病院で療養する人々もおられた。

そんな重要な国民的医療課題に取り組んでいたのが、関西の医療界の精鋭の医師たちで、理想に燃え、高いプライドを誇っていた。 被差別の医療を担わんという志を持してこの世界に飛び込んだ私が、日本の医療を改革せんと志す中堅医師たちの情熱に牽引され、緊張感みなぎる日々を過ごしていた。　そして、そういう場にはつきものの医師間の迫害も見逃せなかった。

しかし新しい学問、そして生命を助けるという使命感が満ちる環境は、人と人との崇高な信頼関係がはぐくまれる場でもあった。

進取の気性に満ちた、日本医療の最高峰のひとつに、静かに真紅の花一輪が存在しておられた。

カミングアウトして懸命に医療を学ぶ途上にあった私への風当たりは決して生易しくはなかったけれど、数少ない女医の先がけとして、美しく毅然として道を切り開いておられたその先生の存在は、実に心強いものであった。

後年　私が開発途上国への国際的医療支援でその病院と連携させていただく御縁が生じ、そちらでご活躍の医療従事者の方々の御協力に大変感激したものですが、中でも日本の女性外科医の先駆者から温かいご支援を頂いた事は思いがけず、本当に嬉しい出来事でした。
決して「情熱」を声高に述べられる事はなく、しかし　何十年も持ち続けておられ、私を精神的に支えて下さった偉大な先輩の存在がこんなに大きかった事を知りました。

時は流れ、季節は移り、そんな変遷の中で、限りある命が受け継がれています。
結核との闘いに半生をささげ、今新たな業病と悪戦苦闘する我々に、人生の閉め方を示された　医の先達が、92 歳で大往生なされた事をご報告せねばなりません。
ご逝去の 5 ヶ月前に、淡々とした口調で最後の挨拶をしたため発送され、いかにも大仕事を終えた一日のようにきちんと人生を閉められて、旅立たれました。

あの静かな山麓の病院、春には桜が舞い、今頃は竹が新芽を吹き、永く病める人々をそっと抱擁していました。
そんな穏やかな空間に　互いに視線で激を飛ばし合い、奮闘する女性医師たちがおりました。人を助けんとメスを取り、厳しく病魔に立ち向かい、時には優しくほほえまれた白衣の大先輩は、我々の心に生き続け、今も光を放っておられます。
最後まで凛として咲き続けられた御姿を御親族から知らせて頂き、改めて身の引きしまる思いです。

NPO 法人ドクターMAYA 人道基金

http://dr-maya.net/